

令和3年4月1日発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel.0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

今月の題字
吉田橙花ちゃん

(みどり市大間々町)
4月から大間々北小のピカピカの1年生。
お母さんの春香さんも25年前に大間々北小入学。小学生初の「にじのかけはし」の題字を書いてくれました。親子二代!



富弘美術館開館三十周年企画展
星野富弘 詩画の世界

今回の企画展は美術館開館三十周年を記念して開催いたします。星野富弘さんの作品の変化を、「詩画が誕生するまで」、「初期作品とペン画」、「一九八〇年〜一九九三年」、「一九九四年〜二〇一〇年」、「二〇一一年〜現在の作品」の五つに分類してその変化をたどります。そして、最終章として「詩画の可能性」のコーナーを設け、音楽や朗読など詩画以外の芸術分野との結びつきによ

星野富弘 詩画の世界
富弘美術館開館30周年企画展
「明日へ続く道」
2021.3.3(水)~8.29(日)
富弘美術館

る、新たな世界への誘いを紹介し、詩画の可能性を探ります。みどり市にも多くのファンを持つ朗読家・渡辺祥子さんが富弘さんの詩やエッセーを朗読したCDが静かに流れ、富弘さんの持つ言葉の世界が十分に伝わってきます。

富弘美術館開館30周年企画展
星野富弘詩画の世界-明日へ続く道-
8月29日(日)まで
入館料 大人520円 小人310円
*新型コロナウイルス感染拡大の状況により予定が変更になる場合があります。

【開催期間中のイベント】

●開館三十周年記念式典
五月十五日(土) (十三時半)

●ギャラリートーク
六月十二日(土)、七月十日(土)、八月十四日(土)

※イベントが中止になる場合があります。お問合せは美術館へ〇二七七九五一六三三三



話
(責・菊)
《308》

日本はなぜアジアの国々から愛されるのか

小耳にはさんだ
『日本はなぜアジアの国々から愛されるのか』という本を読みました。著者の池間哲郎さんは沖繩で生まれ、戦後教育を受ける中でいつの間にか日本に対して不信感を持ち、日本人であることに誇りを持ってなくなっていたそうです。しかし、三十年ほど前から国際協力活動を始め、アジア各地を二回以上訪問して現地の人々から話を聞く中で、日本人は本当に信頼され、愛されていることを知りました。この本のページをめくると、感謝の心が深くよみがえりました。

昭和二十年、敗戦の翌月、昭和天皇は連合国最高司令官マッカーサーを訪ね、「私が戦争の全責任を負います。この上はどうか、国民が生活に困らぬよう、連合国の援助をお願いしたい」と願われました。後にマッカーサーは回顧録で「明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとする勇氣に満ちた態度は、私の骨の髄までもゆり動かした。私はこの瞬間、目の前にいる天皇が個人の資格においても日本の最上の紳士であると感じた」と書いています。アメリカは、戦争に負けた昭和天皇は日本にいらなくなるかと判断し、ロンドンか北京に亡命させ

ようと考えたそうです。ところが天皇は亡命どころか「自分の命はどうなってもいい」と覚悟を決め、終戦の翌年から八年かけて、国民を励ますために日本中を巡幸されました。そして、天皇を迎える日本国民の姿に世界中が驚きました。世界の常識からすれば敗戦国の君主は国民に殺されるか国外逃亡が当然と思われていました。ところが、どこに行っても天皇は歓迎されました。日本国民は天皇陛下を敬愛していたのです。ギネスブックでは、世界で最も古い国は万世一系の天皇を擁する日本であると

認定しているのです。反日教育を続けている近隣の二、三の国以外はみな日本と日本人に好意を持ち、倫理観、道徳心、礼儀正しさは世界一と評価しています。私たちはこの評価を裏切らないように努力しなければいけませんね。二年前、桐生市倫理法人会主催の講演会で池間哲郎さんの講演を聴き、奥様に会いました。奥様を愛し、日本を愛し、アジアの人々への支援活動が続いている池間先生の生き方を

見習いたいと思います。
北(窓)開くという季節があります。北風を防ぐために閉め切っていた北側の窓を開くという彼岸前後の春の訪れを表す季節です。
娘家族三人が我家の裏に越してきてちょうど一年が経ちました。孫の琉馬は四月から小学一年生になります。去年の春、新居にツバメが巣を作り、夏にはみんなでナスを収穫し、秋には「鬼滅の刃」を観に行き、冬には上毛かるたで遊びました。コロナ禍の中、制約の多い一年でしたが我家にとって

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館
今月の作品《308》
堀部幸男さん『稚児地蔵』



仏師・堀部幸男さんと出会ったのは二十数年前。大仏師・松久朋琳の元で修業を重ねた堀部さんが彫る稚児地蔵は世間の注目を集め、写真集まで出版され、一刀彫の稚児地蔵は注文から三年待ちの人気でした。注文から二年後、堀部さんが京都から奥様と一緒に大間々まで届けてくれた日の感激は今でも忘れられません。その後も交流が続きましたが「松崎さんは雨はお好きですか?またお会いしたいですね」という手紙を最後に仏師の世界に旅立たれました。稚児地蔵は今も笑顔で合掌しています。

靖ちゃん日記

令和三年三月十六日(火)
掃除仲間の伊藤さんと二人で沼田市歴史資料館で開催中の企画展「足尾銅山を支えた根利山」を見に行った。明治時代、根利山は足尾銅山の木材供給地として古河製業が開発。百年前には、従業員と家族五千人以上が暮らし、二つの学校、診療所や映画館まで備えた「幻の集落」があり、俗世から離れた「別天地」であったという記憶まで残っていた。
百年前、祖父・松崎友次の長兄が沼田に足利屋という店を出したと聞いて、調べたことがあったが、その時は分らなかつた。
今日、歴史資料館で売っていた百年前の沼田の地図を買った。その地図には何と「足利屋・松崎商店」が載っていた。百年前の根利山と足利屋が結びついていた。
帰りは沼田から根利の山道を通って大間々へ帰ってきた。伊藤さんの真っ赤まオーブンカーを運転させてもらって、赤い車に感謝感謝だった。赤い車のナンバーは3939だった。
北(窓)開くという季節があります。北風を防ぐために閉め切っていた北側の窓を開くという彼岸前後の春の訪れを表す季節です。
娘家族三人が我家の裏に越してきてちょうど一年が経ちました。孫の琉馬は四月から小学一年生になります。去年の春、新居にツバメが巣を作り、夏にはみんなでナスを収穫し、秋には「鬼滅の刃」を観に行き、冬には上毛かるたで遊びました。コロナ禍の中、制約の多い一年でしたが我家にとって

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百九号は令和三年五月一日(土)発行予定です。

♡ やつちゃんの似顔絵提供: ひさかさん